
BOX

あり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BOX

【Zマーク】

Z4960D

【作者名】

あり

【あらすじ】

皆山高校に入学したばかりの片屋真治はちょっととした出来心で女の子をつけて今は使われていない旧校舎に入ってしまった。そこでどんでもないトラブルに巻き込まれてしまい……

第一話・学園生活スタート

綺麗だ……

そんな感想しか浮かばないほどに彼女は綺麗だつた。俺の名前は片屋 真治昨日この若山高校で入学式を終えたばかりのできたてホヤホヤの一年生だ。

俺は今とある女性をつけているおつと勘違いしてもらつては困るけつしてストーカーではないただ彼女が気になると俺の第六感が告げているのだ。

彼女をつけていると意外にも彼女が向かつた場所は今は使われていないため誰も近づいていないと言われる旧校舎に向かつっていたうちの学校は私立ということもあり敷地はかなりの広さだつた。

初めて見たが近くで見るとまだそれなりに校舎として機能しそうな風貌を維持していた。彼女は立ち入り禁止区域である旧校舎になんのためらいもなく入つていった。

俺は彼女と違い少しためらつたがやはり彼女が気になつたので入つていった。

旧校舎の入り口に踏み込んだ時空氣といつか雰囲氣というか何かが変わつた気がした。

しかし旧校舎に入るとき少しためらつたのが災いした入つたあとすぐには彼女を見失つてしまつた。

「参つたな見失つちまつた」

その時後ろから不意に何かが飛び出してきた。

「グルルル……」

その動物は……いやこんな動物はどんな図鑑を見ても載つていないだろう。

「な……なんだこいつは」

まあ言葉では伝わりにくいと思うが体は大きさが大型犬の犬でいいのだが首から上が問題だ、なんとその首は途中で二つに別れ片方が

犬片方が猿というなんとも奇妙な形をしていた。
明らかにそいつは俺を敵対視していた。

「グルルル…グワツ」

そいつはしばらく俺は睨んだ後急に鋭い牙をむき出しにして襲いかかってきた。「うわつ」

俺は間一髪で避けられたが右肩に浅い傷を負った。

「くそつ…これでもくらえ！」

俺はそこに落ちていたほうきで殴りかかった。

「ガウツ」

そのほうきを口で受け止めたあと簡単に噛み碎いた。命が危ないと感じた俺は走つて逃げようと思ったが。万事休す少し先は行き止まりだつた。

俺は目をつぶり念佛を唱えていた、その時

「カイトツ」

「分かつた」

「キャイーン」

急に誰かの声が聞こえたと思つたら俺に飛びかかるとした生き物の前に小さな犬に羽が生えたような小さな生き物がてをかざすとあの変な生き物は壁にぶつかつたように弾かれた。

「カイトあのブラツクの弱点属性は？」

「いま調べてる……分かつたよ氷だ」

「氷だな」

そのカイトとかいう生き物に命令をだしているうちの制服をきた男はポケットから四角い箱と水色の球を2つ取り出した。

「運が悪いなお前氷は俺の得意分野だぜ」

男は取り出した箱の中に2つの球を入れた。

「水の宝玉2つを捧げる」そういうとその男は箱をにあのブラツクと呼んでいる生き物に向けた。

「フリストツ」

そう言うと箱の中から突然氷の柱が出てきてそのブラツクが貫かれ

た。

「キャンツ」

その程度の断末魔をあげる位しか力が残つて無かつたのか全くそれから動かなくなつた。

「ふうつ終わつたか君大丈夫かい?」

この出来事が俺の高校生活を大きく狂わせるとはこの時は考える余裕は無かつた

「君大丈夫かい」

そう言われてさしのべられた手を俺は素直に握り返した

「え~と…」

俺はたくさん聞きたいことがあつたので何から聞いつかと思つていた。

「頭が混乱しているようだなまあまづは自己紹介からだな俺は三年の神田 樹だ」こいつはホワイトのカイトだ

「よろしく!」

「君の名前を教えてくれるかな」

「あ、はい俺の名前は片屋 真治ですええっとなんかよく分からないけど危ないとこりをありがとうございました神田先輩」

「いや今回の事件は俺達生徒会側の落ち度だまさか査定漏れした生徒がいるとはこんなことは前代未聞だ」「ホントホント生徒会始まつて以来の不祥事だよこれは」

「はあ…」

俺は何の話をしているのかよく分からなかつた。

「まあ、とりあえず君には話さなければいけないことがたくさんあります、君の怪我をなんとかしなければなるまずは、君の怪我をなんとかしなればな」

そう言えば肩の怪我をすっかり忘れていた。

「先輩はかどつてますか」急に後ろから話し声聞こえてきた。

「あら、君は誰?一年生の生徒会で君を見た覚えが無いんだけど」

「ああ、彼については生徒会室で話すそれよりちよづ良かつたちよつと彼の傷を治してやつてくれないか

「はあ…」

「ふーん分かりましたネニアよひじく
はーい」

見ると知らない女性の肩にも猫のような小さな生き物が浮いていた。
「ちょっとの間動かないでね」

言われた通りにしているとなんと肩の傷がどんどん塞がつていつた。

「うひうわ傷が」

「ふふすごいでしょ」

その猫のような生き物が得意そうな顔をしていた。「まあ、とりあえずこれでいいな片屋くん一緒に生徒会室に来てもらえるかい?」「へ、わ、分かりました」「気にしないでいい別に反省文を書かせようとかそういう訳ではないでは行こうか」

神田先輩は生徒会に移動している途中の道で

「ああ、紹介が遅れたな彼女は一年生の中富 加奈枝だ中富彼は一

年の片屋 真治だ」

「ふふ、よひしく片屋くんあ、そつそつこの片屋はねア仲良くなつてあげて」

「ネニアだよ、よひしく「片屋です」

俺はなかなか頭が整理出来なかつたこれからどうのよつなことを話されるとか考へる余裕もないほどに…

第一話・学園生活スタート（後書き）

初投稿です、楽しんで読んでもらえれば幸いです。

第一話・破天荒設定

「……！まさか、そんな事例今まで聞いたことないですよ
中宮先輩は信じられないというような顔をしていました。「確かに信じられないのは分かるが現にこうして彼は力を持つていないのにあの旧校舎に入ることができたこれはまぎれもない真実だ」
俺はやはり話の意味が理解できなかつた。

「ええっとそろそろ俺にも分かるように話をしてもうえませんか？」

「ああ、すまないそろそろ話を始めよ。まず君はこの学校の生徒会がどのような基準で選ばれているか知つていいかい？」

「え」と…確かに中学時代の成績などで決まり三年間生徒会を委員会活動として続けるだつたような気が

「その通りだしかし実際は中学時代の成績なんかまったく関係無いんだ」

「へ、…そなんですか」「ああ君も見ただろう俺が四角い箱と球を出して何かしているところを」

「ああ、あの…変な」

「そうあの力などを使い旧校舎に現れるブラックと呼ばれる魔物を倒すことが我が砦山高校生徒会の使命だしかし力を使える者は限られていてその力を使える者のことをウィザードというのだが入学試験の時にウィザードの適合試験もわからないように行われているそして適合試験に合格したものがうちの学校に入学するときはうちの生徒会に入つてもらうのだしかし君は適合試験に受からなかつたにも関わらずあのウィザード以外は入れないはずの旧校舎に入つている

「え」とそんな一気にいわれても何がなんだか

「俺の頭はもうパンク寸前だつた。

「ああ、すまんな昔から説明は苦手なんだ」

「まず、何での旧校舎にあんな訳のわからないそのブラックとか

「いやつが現れるんです?」「

「そうだなそこは、話せば長くなるから次の機会に話すとしよう
ず君には他の人たちと同じようにBOXとホワイトを持たなければ
な」

「ひやりすでに俺は生徒会入りが決定しているらしく」「まず、君にはホワイトといつこのカイトのような生き物を生み出してもらう」「はあー、あのどうすれば」

「君にもウイザードの力があるのはもう立証されているならば右手をに出してクライツと唱えれば生まれるはずだ」

俺は言われた通り右手を前に出して唱えた。

「クライツ」

すると右手の掌が光氣付いたら一匹の小さな竜が俺の掌の上に浮いていた。

「…………竜のホワイトだと聞いたことないぞそんなの。」

「いえ、先例が一つだけあるわ前代校長……」

「なるほどだからこそ君は査定から漏れたのかもなあ片屋そのホワイトに名前を聞くんだ」

「名前を教えてくれるか?」

「……ソルト」

その竜はゆっくりと答えた「君には驚かされてばかりだな査定漏れした次は竜のホワイトを産み出すとは」神田先輩は本当に驚いたようだった。

「ホント面白い後輩さん」俺はソルトと名乗る竜に話しかけてみた。
「よろしくなえ」とソルト

「君が僕のパートナーなの?」

「あ……ああ、そうだよろしくな!」

「うん、よろしく……名前は?」

まあよく分からんが長い付き合いになりそだから真治でいいよ

「……そうかよろしく真治」「なかなか素直なホワイトじゃないかソルトくん君のタイプは?」

「片屋真治だ

「…ソルトでいい、攻撃型、属性は火」

「攻撃型かちょうど良かつたでは片屋くんには次の話をするとして
うあの旧校舎についてたが」

「あ、そうそうあの校舎は一体なんなんですか？」

「あ、一つと一番の疑問が解けそうだった。

「片屋、君はあの校舎に入るときなにか変な感じがしなかったかい
？」

俺は旧校舎に入るときに感じた変な感覚を思い出した「あ、確かに
なんか変な感覚がありました」

「あの旧校舎は現実とは世界が違うんだいうなれば電腦世界という
やつだ。」

「電腦世界つまりあの中はインターネットみたいなものなんですか
？」

「そんなSFの世界のような話があるのか。

「まあ実際に存在するのだから信じてくれそれでのブラックはバ
グのよくなものだ」

「あいつらをほっとくとどうなるんですか？」

「あいつらは消していかないと電腦世界がどんどん広がりこの現実
の世界が電腦世界になりブラックがのさばる世界になってしまふ」

「なるほどそんな理由が」「まあそれを見回るチームは学年でわけ
て三人一組なんだがバランスの良さ的には攻撃方法に富んだ攻撃型
攻撃型を後ろから守る守備・回復型現実世界から電腦世界全体の情
報を送る情報型このチームが一番好ましいのだがちょうど一年に攻
撃型がいなかつたんだ。

「すいませーん遅れました」

「ああ、君たちちょうど良かつた君たちのチームに入ることになっ
た片屋真治くんだ」

そこにはオレンジ色の長い髪の」とシヨートヘアーの白い髪でメガ
ネをかけた子の一人の女の子が入ってきた白い髪の女の子はノート
パソコンを持つていて

するとオレンジ色の髪をした女の子が駆け寄ってきた「え、てこと
は私達のチームもやつと活動できるんですね私、翡翠薫、よろしく
ね片屋くん」

「ああ、よろしく翡翠さん」

気付くと翡翠さんの横にもう一人の白い髪女子がたつていた。

「…雪野小百合」

「ああ、よろしく（汗）」

だんだん俺の生徒会活動が現実味を帯びてきていった。

第一話・破天荒設定（後書き）

更新遅くてすいません。楽しんで読んでもらえたならうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4960d/>

BOX

2010年10月14日15時02分発行